令和５年度
内灘町子ども読書感想文
コンクール作品集

発行　内灘町学びの風推進協議会
内灘町教育委員会

令和五年度　内灘町子ども読書感想文コンクール　作品集

《目　次》

【小学生の部】

おやこのきずな　大根布小学校一年　菊田　稜心　1

「うまれてくるよ海のなか」をよんで　西荒屋小学校一年　中新　真緒　2

みんなをささえるヒーローたち　清湖小学校二年　板谷　将虎　4

「それで、いい！」を読んで　鶴ケ丘小学校二年　橋本　文乃　5

0てんとったらどうしよう！　向粟崎小学校三年　的場　楓香　7

「盲導犬デニム」を読んで　鶴ケ丘小学校三年　宮川　星乃介　9

おおきな木を読んで　白帆台小学校四年　玉置　大樹　11

世界中の取扱説明書　西荒屋小学校四年　新出　彪馬　13

「電池がきれるまで」を読んで　向粟崎小学校五年　蔦濱　莉帆　15

えびす舞のきずな　清湖小学校五年　喜多　柚月　17

みんなのために動いてみよう　清湖小学校六年　武田　唯音　19

「中村哲物語」を読んで　白帆台小学校六年　西浦　百香　21

【中学生の部】

絆を信じる　内灘中学校二年　室田　梨湖　23

自分も誰かのタカラモノ　内灘中学校二年　大多　虹乃花　26

愛は地球を救う　内灘中学校三年　徳川　碧乃　29

料理から学ぶこと　内灘中学校三年　小林　玉緒　32

令和五年度　内灘町子ども読書感想文コンクール　入賞作品一覧　35

編集後記　40

おやこのきずな

大根布小学校　一年　きくだ　いっしん

ぼくはいきもののほんやずかんをよむのがだいすきです。おやすみのひに、すいぞくかんやどうぶつえんにいくのがたのしみです。このほんには、たくさんのうみのいきものとそのたまごがでてきます。とってもきれいなしゃしんもたくさんでてきて、うみのなかにもぐってみたくなりました。

タツノオトシゴのおかあさんは、たまごをおとうさんのおなかのふくろにうんで、おとうさんのおなかからうまれるなんて、びっくりしました。おとうさんがおかあさんのきぶんになれるなんて、とてもおもしろいなとおもいました。ぼくはいもうとがうまれるまえ、ぼくやおとうさんはおなかのなかにあかちゃんがいるなんて、どんなかんじなのかそうぞうできなかったので、タツノオトシゴのおとうさんは、にんげんにはできないことができて、うらやましいなとおもいました。

このほんをよんで、うみのいきものは、おとうさんがいっしょうけんめいに、たまごのおせわをしてまもっているのがとてもかっこいいなとおもいました。みつからないようにてきからまもるために、たまごにちかづくやつをやっつけて、つよくてゆうかんだとおもいました。ぼくのおとうさんも、おしごとでいそがしいのにいつもぼくをまもってくれます。おかあさんは、ごはんのじゅんびなどでいそがしいのに、それでもぼくをまもってくれます。ぼくはまだこどもだからあかちゃんはいないけど、かわいいいもうとたちのことを、いそがしいおとうさんとおかあさんのかわりにまもってあげたいなとおもいました。

うまれたこどもたちが、ぶじにそだてと、いっしょうけんめいなのは、にんげんもおなじ。ぼくもおとうさんとおかあさんが、これまでいっしょうけんめいにまもって、そしてたいせつにそだててくれたので、ごはんをたくさんたべて、しっかりとべんきょうをして、いっぱいあそんでいっぱいわらって、おおきくりっぱにせいちょうしたいとおもいます。

「うまれてくるよ海のなか」をよんで

西荒屋小学校　一年　なかしん　まお

わたしは、このほんのひょうしをみて、とてもすてきだとおもいました。どうしてかというと、さかなのひれがうつくしいとおもったからです。

よんでみると、このほんは、うみのなかでたまごをそだてるさかなたちのおはなしでした。たくさんのうみのあかちゃんをそだてるいきものは、にんげんのそだてかたとちがっていて、どれもびっくりしました。

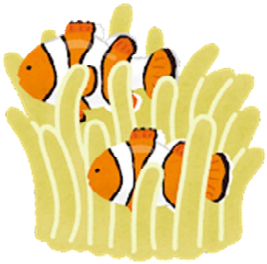
とくにおどろいたみっつのいきものがいました。ひとつはクマノミです。ほんには、おとうさんクマノミがあかちゃんたまごにちかづいているしゃしんがありました。それは、おとうさんがたまご

のまわりにあたらしいみずをふきかけて、おせわしているそうです。おかあさんはゆっくりやすむなんて、おとうさんクマノミはたいへんだなとおもいました。

ふたつめのいきものは、キンセンイシモチです。しゃしんをみて、たまごがたべられているのかとしんぱいになりました。でも、ちがっていて、キンセンイシモチのおとうさんは、くちのなかでたまごをまもっていました。またまたおとうさんがかつやくしていました。

さいごにおどろいたのがコブダイです。コブダイはうみのなかにたくさんのたまごをうみます。でもそのたまごのおせわはしないそうです。あかちゃんをまもらないのがとてもふしぎです。にんげんだったらたいへんなことになります。やっぱりさかなとにんげんはちがうなとおもいました。

けれども、おなじだときづいたことがあります。それは、どのさかなのおとうさんもおかあさんもとてもたまごをたいせつにしているなとおもいました。わたしもおとうさんとおかあさんにたいせつにしてもらっています。そしてわたしも、もうすぐうまれてくるあかちゃんをたいせつにしていこうとおもいます。さかなのまねもしてみたいので、なんかいもこのほんをよんで、かぞくみんなであかちゃんをまもっていきたいです。



みんなをささえるヒーローたち

清湖小学校　二年　いたたに　まさとら

「わたしがパジャマにきがえるころ、ママは、でかける。たいせつな仕ごとに行くんだ。」という見出しをみてこの本を読んで見たいと思いました。わけは、よるになるとみんなねてすごすものだと思っていたけど、よるにしごとをしているということにとてもおどろいたからです。

本の中では、ビルのそうじや、びょういんではたらく人、けいさつかんやほうどうの人、24じ間えいぎょうのスーパーなどではたらく人たちが出てきました。ぼくがねむっているよるの間にもこまっている人をたすけたり、安全をまもってくれる人たちのおかげで毎日安しんしてくらしていられることにはじめて気がつきました。

この本に出てくるお母さんは、よるにバスのうんてん手をしているけど、ぼくのお母さんは、おうちでお仕ごとをしているから、いつもいえにいてくれてぼくが学校に行くときにお見おくりや出むかえをしてくれることが本当は、とてもありがたいことなんだと思いました。そしてこの本のお母さんのように、あさに帰ってくるという人がいるように色んな生かつの仕方をしている人がたくさんいるということも知ることができました。

ぼくはこのおはなしを読んで、しょうらいけいさつかんになってよるの町のさまざまなトラブルをかいけつしたり、こまっている人をたすけたりしてみんなの安全をまもれるようなお仕ごとをしたいと思いました。そして毎日よるにはたらいてくれてる人たちがいることにぼくもかんしゃをしたいと思います。

「それで、いい！」を読んで

鶴ケ丘小学校　二年　はしもと　ふみの

わたしは、絵をかくことが大すきです。この本は、絵をかく話でおもしろそうだったので読むことにしました。

ある日、きつねが絵をかいていたらノラネコが「だっせぇ」などいやなことばを言いました。あひるも「はみ出ているからだめだわ」と言いました。それでもきつねは、あきらめずにがんばって絵をかきつづけました。すると、そのきつねがかいた絵をすきだといううさぎがあらわれて、「その絵すき、それでいい」と言ってくれました。そのうさぎがきつねのかいた絵をコンクールにおうぼしていました。コンクールを見に行くと、みんながきつねのかいた絵をじーっと見つめていて、それは、うさぎがにっこりとした絵だったという話です。

きつねがみんなにいやなことを言われたけどがまんしながらもずっと絵をかきつづけたところがこころにのこりました。なぜかというと、わたしもきつねとおなじ気もちになったことがあるからです。体いくのじかん、およげなかったときにまわりの子に、「およげないんや」と言われて、くやしい気もちになっておよぐことをやめたいなと思ったけれど、あきらめずにすこしでもおよげるようにがんばりました。まえよりもすこしおよげるようになったので、うれしかったです。

この本を読んで、人がいっしょうけんめいがんばっているのに、いやなことばを言うことは、よくないとわかりました。そして、じぶんがやりたいことやすきなことは、まわりからなにを言わ

れたとしてもつづけることが大切だと思いました。
わたしは、これからもべんきょうと絵をかくこと
とピアノをがんばっていきたいです。きつねさん
うさぎさん、わたしに大切なことを教えてくれて
ありがとう。

０てんとったらどうしよう！

向粟崎小学校　三年　まと場　ふうか

わたしが０点をとったらどんな気もちになるかなあとそうぞうしてみました。やっぱり友だちにも家族にも見せたくないと思います。しゅ人公のてつ男くんもさいしょはだれにも見せたくない気分でした。でも、「０てんにかんぱい」と言う言葉を知った時に、しゅ人公もわたしもびっくりしました。どうしてかと言うと、ふつうだったら１００点でかんぱいすると思ったからです。

一番いんしょうにのこった場面は、林てつ男くんと岩田明くんが漢字テストで１００点をとった場面です。どうしてかと言うと、さいしょは悪い点数だったのに「漢字のおきょう」のおかげで１００点をとれたからです。わたしも、「漢字のおきょう」をしてみたいです。

わたしは、ふたばおじさんがこのお話の中で大切なやくわりをしていると思いました。どうしてかと言うと、しゅ人公やしゅ人公の友だちがおちこんでいる時にはげましてくれたり、いろんな言葉を教えてくれたりしたからです。たとえば、この本の題名にもなっている、「０てんにかんぱい」です。この言葉はふたばおじさんが子どもの時、理科のテストで０点をとっておかあさんがおこって学校に電話をしたけど学校にだれもいなくて自分をはげます会と「０てんにかんぱい」をしてこの言葉が出てわたしはとてもふしぎだなあと思いました。

次に、「かあちゃんびょう」です。この言葉は「テストでいい点がとれますように、うちの子は、よくできる子だと、先生にみとめてもらえますよ

うに」と言う意味できっとうちのママもそうなのかなあと思いました。

わたしは、漢字がにが手なので、いろいろくふうしておぼえたいです。おぼえるとしたら、ピアノの先生も言っている、声に出しておぼえたらいいと思います。本の中では、「漢字のおきょう」をしておぼえていました。まず声に出してから漢字を書いておぼえていました。また、漢字のたし算とひき算をしていました。わたしは漢字でたし算とひき算ができるなんてはじめて知ったのでびっくりしました。たとえば林は、木＋木＝林で、畑－火＝田になります。わたしも漢字をおぼえる時にたし算とひき算をしてみたいと思います。

わたしは、テストの点数だけに気をとられていたけど、悪い点をとってもその後どうするかが大切なのだと気づきました。お話の中で明くんが言葉の意味のテストで悪い点をとってしまったけど、ふたばおじさんが、「国語の教科書をくりかえしよめばいいよ」とアドバイスしていました。悪い点をとってもふくしゅうしたり、くふうしてやり直せばいいと分かりました。

さいしょは題名を見た時、どうして０てんにかんぱいなのか分からなかったけど、この本を読んで悪いけっかだったとしてもそこであきらめないで次は良いけっかになるようにいろいろくふうしてがんばりたいです。この本を友だちにも読んでほしいです。

「盲導犬デニム」を読んで

鶴ケ丘小学校　三年　宮川　星乃介

夏休み前、この本が昔にドラマ化したことがあることを知って、この本を読んでみたいと思い、この本を読むことに決めました。主人公の犬のデニムは小さいころからもうどう犬になるためにいろいろなくんれんをして、目のふ自由な人をささえるやく目をはたした犬です。歩く途中のしょうがい物をよけたり、だんさやしん号できけんを知らせるために直前できちんと止まったりして、もうどう犬はとてもかしこいのだなと思いました。もうどう犬のくんれんはとてもきびしくて、さらに犬がいやがっていることをむ理やりにやらせるなんて、とてもかわいそうだと思っていました。でもこの本を読んで、犬は人のためにうごいたりパートナーの言うことを待ったりすることが楽しいということをしり、ホッとあん心しました。ぼくはいつもめがねをかけているのですがかけるのをわすれて学校に行ったことがあります。いつも当たり前に見えている道もふあんでつまづいたりぶつけてしまいました。目のふ自由な人は、わたしたちが想ぞうできないようなふあんな気持ちがあるにちがいありません。ぼくはめがねを忘れてしまった時、横に友だちがいて、何かあると教えてくれたりサポートしてくれたのでとてもあん心できました。だから目のふ自由な人にとってもうどう犬がそばにいてくれることはとても心強いそんざいで、とてもあん心できるのだろうと思います。もうどう犬は大切な目のかわりなのだと思いました。またしんらいできるパートナーであると思います。本にでてくるもうどう犬のデニムの

パートナーの吉田さんがデニムをひつようとしているようにおたがいとてもしんらいしているのがとても伝わってきて感どうしました。とくに吉田さんが「私一人だと歩きだすこともこわいし、前にすすめないけどデニムがいるからあん全な場所を教えてくれるし、色々なところにつれていってくれる」と言っていたことがとても心にのこりました。

ぼくはこの本を読んで、ともにささえあえることの大切さを知りました。たがいにささえあうということは生きるゆうきや力を分け合うことだと思います。ふかのうだと思ったことが、助け合いでかのうになったり、おたがい思いあうことでふあんがなくなり、しあわせな気持ちになると思います。これからぼく自身もたくさんの人にささえられてせい長していくと思います。その中で、ぼくもだれかをささえていくことができたらいいなと思いました。これからは学校で困っている人を見たら、やさしく声をかけてささえあいたいと思います。家でも弟が困っていたり泣いていたりしたら助けてあげられるやさしい兄になりたいと思いました。

おおきな木を読んで

白帆台小学校　四年　玉置　大樹

まずなぜこの本を読みたいと思ったかというと、自分の名前が大きな樹と書いて大樹だからです。表紙には、おおきな木と少年が書いてありどんな物語になるのかと想ぞうがふくらみました。この物語は少年と大きな木の会話で物語が進んでいきます。少年は大きな木と最初は遊ぶだけでしたが、おねがいをするようになってきます。少年はおとなになっていったのです。時にはお金をちょうだいと言ってみたり、家がほしいと言いだしたりします。そのたびに大きな木はあるだけのリンゴをわたしたりあるだけのえだを切ったりして、少年のねがいをかなえていきます。ぼくはなぜそこまでするのかふしぎに思いました。なぜなら、大きな木のほうは、かなえるばかりで自分のおねがいをすることはなかったからです。もう一つふしぎに思ったことがあります。少年がおじいちゃんになっても大きな木は、ぼうやとよんでいることです。何度も読んでいて少しずつ気づいたことと、わかってきたことがありました。大きな木は少年のねがいをかなえてあげること自体が幸せだったのです。何かをしてもらうだけが幸せなのではなく、大切な人に何かをしてあげることも幸せなのだと知りました。それに気づけた理由は、父と母のぼくに対する行動と同じだったからです。ぼくのために力になることが幸せだとよく言っているからです。そう考えると、もう一つふしぎだったずっとぼうやとよびつづける理由もわかってきました。きっと大きな木にとって少年は自分の子どものようなそんざいだったのかもしれないと思い

ました。最後に大きな木は少年のねがいをかなえるためにみきすらもさし出しました。そのみきで少年は舟を作り遠くにたびだちました。少年とはなれてしまい、はじめて幸せになれませんでした。しかし、ずいぶんと長い時間がたち少年はもどってきました。その時に大きな木は何もあげる物はのこっていないと話しました。しかし少年もおじいさんになっており、とくに何もひつようとはしなくなっていました。つかれたのでしずかに休める場所があればと切り株になっていた大きな木にこしをおろしました。大きな木はそれで幸せでした。まだぼくには大きな木の気持ちはよく分かりません。きっといつか大切な人ができた時に分かるかと思います。そして親からもらったこの大樹という名前にも同じような意味がこめられているのではないかと思いました。大切な人をたくさん作り、その人達の力になってあげられる人間になりたいと思いました。その時にぼく自身も幸せだったらいいなと思います。この本は、自分が大人になったり親になったり、おじいちゃんになったりいろいろなタイミングで読みかえしてみたいと思う本でした。きっと感じることもかわってくると思います。そのときにこの本の作者が伝えたかったことが今よりも分かってくる気がします。なのでこの本をお気に入り箱にしまって、この読書感想文をおわります。

世界中の取扱説明書

西荒屋小学校　四年　新出　彪馬

ぼくが、この本を選んだ理由は、「かあちゃん取扱説明書」と言うタイトルがすごく気になったことと、ぼくも大好きなお母さんの取扱説明書を書いてみようと思ったからです。

この本のお話は、てつやがすごくお母さんにおこられていて、どうしたらお母さんに、おこられないかを考えたすえに、取扱説明書を作って、あやつろうとした話です。

この本を読んでおどろいたことは、二つあります。一つめは、お母さんのことをよく知っているところです。その理由は、てつやがお母さんのせいかくや毎日する行動、体のとくちょうを分かりやすく説明することができるからです。しかも、ふだんお母さんは、仕事で家にいないのに、よくお母さんのことを知っているなとおどろきました。

だけどぼくは、四才の弟のことはよく知っています。なぜなら弟とは、いつもケンカをしたり、わがままをたくさん言われるので、どうしたら弟がぼくの言うことを聞いてくれるかを考えるからです。その反対にお母さんには、ぼくのやりたいことやほしいものばかり伝え、お母さんの気持ちや考え方を全く考えずに話していたことに気づきました。だからぼくは、お母さんの取扱説明書を書くことができなかったんだと思います。

二つめにおどろいたことは、てつやが考えた取扱説明書の中でねぼうした時に「おなかがいたい」とえんぎをすると書いてある所です。その理由は、ぼくはお母さんにおこられないために、体調が悪いと言うウソをつくのは、考えられませんでした。

それは、体調が悪いとお母さんに言うと、とっても心配してしまうからです。だからぼくは、このてつやの考えには共感できなかったし、おどろきました。

また、本当に体調が悪いことを信じてしまったら、お母さんは仕事も休んで色々な人にめいわくをかけてしまうかもしれないと思うとてつやの考えた取扱説明書には、なっとくできなかったです。

最後にぼくは、この本を読む前と読んだ後では、考え方が変わりました。それは、取扱説明書があったら、最初はお母さんをあやつって言うことをきかせることができてうれしいなと思っていました。しかしぼくはこの本を読み終えてあることに気がつきました。それは、「取扱説明書」は言うことをきかせるためのものではなく、「人との関係を良くする」ための手だんなんだとわかったからです。

だから、ぼくはお母さんともっともっと仲良くなるために、お母さんのせいかくや考え方をよく知っていきたいと思いました。

この本を通して、人のことを知ろうとすること、相手の気持ちを理かいしようとすることは、すごく大切なことだと分かりました。世界中の人々が相手のことを思いやりコミュニケーションができれば戦争がなくなり平和につながると思いました。ぼくは、まず自分の家族と仲良くなるためにど力していきます。

「電池がきれるまで」を読んで

向粟崎小学校　五年　蔦濱　莉帆

私は、五年生の道徳の授業で、命の大切さと生きることの意味を勉強しました。その授業の中で紹介された「みやこしゆきな」さんの「命」という詩がとても印象に残っていました。前に、この話を家に帰ってからお母さんにするとおばあちゃんの家にこの詩が書いてある本があることを教えてもらいました。せっかくなのでこの詩が書いてある本を読んでみたいと思いました。私は授業で学んだことを思い出しながら、すぐにこの本を読み始めました。

「電池が切れるまで」には、みやこしゆきなさんという人が出てきます。この人は五さいの時に神経芽細胞腫という病気になって、長野県立こども病院という場所で長い間入院していた小学四年生の女の子です。

この病院の中には院内学級というものがあります。ここは病気の治りょうをしながら学校に通って勉強する場所です。ここにはゆきなさんと同じように、病気の治りょうをしながら院内学級に通う子供がいて、その人たちが書いた作品を一冊の本にまとめたお話です。

私がこの本を読んで気になったところは、ゆきなさんの命という詩に、命はいつかなくなってしまうもので、電池みたいだと例えられているところです。なぜなら私はそのとおりだと思ったからです。命は一つだけで、命が終わるというのは死ぬということです。電池が切れた時に新しいものに交換するように、命を新しいものに交換することはできないからです。

気になったところは命なんかいらないと言って命をむだにする人もいる。まだたくさんの命が使えるのに、そんな人を見ると悲しくなるのです。なぜなら、ゆきなさんは十一さいで亡くなってしまいましたがもっと生きたいと思っていたと思ったからです。ゆきなさんは自分の命をいらないと言ってむだにする人を見るととても悲しくてさみしい気持ちだったのかなと思いました。ゆきなさんの家族もとても悲しかったと思いました。私ももうすぐ十一さいになります。私が病気になったり、命をむだにしてしまうと家族が悲しむだろうなと思いました。

他には、命は休むことなく働いている。だから私は命疲れたというまでせいいっぱい生きようというところです。私は、毎日学校に通っていて悩むこともあります。疲れたな、いやだなと思うこともたくさんあります。

二〇二二年の自殺者数のうち学生で自殺した人は一〇六三人です。小学生は十七人もいます。私は、この話を聞いて小学生でも自殺する人がいることを初めて知りました。そして、とても悲しくなりました。

この本を読み終わって、悩むこともあるけど自分で命をむだにするようなことはしないでおこうと思いました。なぜならゆきなさんがあの詩を書いたのは生きるって幸せなのだと伝えたいと思ったからです。これからも、家族や友達を大切にして生きていきたいです。

えびす舞のきずな

清湖小学校　五年　喜多　柚月

この本は太一と優希の二人がえびす舞を通して、失敗をくり返して成長していく物語です。えびす舞とは、八戸市のえんぶりという豊作を祈願する伝統的なお祭りでおどる舞のことです。私も今年の町民体育祭という町の行事でチアリーディングに参加し、えびす舞と似たような経験をしました。その中で、太一の気持ちがよく分かる出来事がありました。

一つ目は、人前に出ておどることがはずかしくて、はじめは参加したくなかった事です。学校では、友達や先生が見守ってくれるけど町の行事では、知らない人がたくさん見ているので、とてもきん張してしまいます。

二つ目は、観客の見ている前で失敗したくない気持ちがあった事です。失敗は成功のもとだと分かっていても、失敗するかもしれないことに挑戦することは、とても勇気がいることだと思います。私は、太一がどうやってこの二つの気持ちをこく服したか考えながら読みました。

太一は、親方の

「太一、やってみねど」

の一言で断れなくて、参加することに決めました。だけど、親方の見た人を喜ばせたい気持ちに太一が気づいて、一生けん命練習するようになりました。練習をしていくうちに、二人はけんかをしながら、本当の自分のことを正直に打ち明けていきました。私は、正直に打ち明けたから、二人は信じ合って最後まで協力し、えびす舞を成功させる

ことができたのだと思いました。いっしょに努力する仲間がいると、失敗をおそれずに挑戦することができるのだと思いました。私も、チアリーディングのとき、仲間がいることで失敗しても、安心しておどりきることができました。

それは、仲間のことを信じる気持ちと、自分のことを信じる気持ちを持てたからだと思います。太一や優希と同じように、私もおどり終わったときのはく手や、見てくれていた家族の笑顔が一番嬉しかったです。

私はこの本を読んで、正直になることについて考えました。家族や友達の前で、正直になることがむずかしいこともあります。それは、相手の気持ちを考えて伝えようとしているからだけど、正直に言えなくて苦しいときもあります。お母さんにそのことを伝えたら気持ちが楽になりました。

次に、友達について考えました。私はこの本を読んで改めて友達は大事だと気づきました。友達は、授業中に教えてくれたり、委員会やクラブ活動のときなどに手伝ってくれたりします。でも心の中は見えません。友達がこまっていることや、なやんでいることがあるときに、表情や声で気がついて、助けられる人になりたいです。

みんなのために動いてみよう

清湖小学校　六年　武田　唯音

この本を選んだ理由は題名から、茶畑というワードにきょう味をもっていて、どんなものなのか気になりました。また、絵もとてもきれいで印象が良かったのでこの本を選びました。この本のあらすじは、主人公の周が学校で唯一の友達だった洋介が健一郎と仲良くなります。そのことによって、周は健一郎たちからばかにされて、学校に行きたくなくなりました。その時、メールでおじいちゃんに、いっしょにスリランカに、いかないかとさそわれました。そこで、周はスリランカに行くことを決め、スリランカに行き、周がいろんな人と出会い、いろいろなことを学ぶ物語です。

ぼくは、この本を読んで周がスリランカでいろんな所に行って、どんどんと前の自分よりも心も体も成長していく周を見て、とても感動しました。この本の主人公の周と自分は重なることが二つあります。一つ目は、学校で友達と思ったところがちがうと気まずいことです。自分の体験では、「好きな物」という話題で話している時、最初の方は盛り上がるので気まずさはないけれど、いつも、「ポケモン」と「マイクラ」というゲームの好きな物が、ちがうのでとても気まずくなってしまいます。この話によって話すことが無くなってしまい、もっと気まずくなり時には仲が悪くなってしまう時もあります。二つ目は、周のようにずっと同じ場所にいると、トラブルがおこっていていやな気持ちになってしまうことです。自分は、トラブルが、まわりでおこっていていやな気分になる時があります。そんな時は外に行って気分

転かんできて気分がスッキリして、少しいい気分で次の授業を受けることができます。これは、周もやっていることで、周は山が見られるきれいなところを見て自分のなやみをはき出しています。その周の気持ちは、自分もよく分かります。

この本を読んでみて、周がスリランカにいるいろいろな人に会って、変わっていく姿に自分も周みたいに、どんな人とも向き合えるような、心の広い人にとてもあこがれます。自分も周のような、どんな人とも向き合える心の広い人になりたいと思いました。また、周がスリランカで会ったいろんな人たちと最初は思ったことが言えずにこまっていたけれども、だんだんとスリランカで会った人と仲良くなり、いきいきと話しているところを見て、周が日本にいたときとまったくちがう姿でたくましくなっていて、おどろいたのが半分、感動が半分ぐらいの気持ちになりました。

自分は、これから周のように人としっかり向きあえるようになりたいです。そのために具体的には、いやな人でもその人にはその人なりのなやみがあると思うのでしっかりと向き合って話を聞いてあげるようにすることをしていきたいです。他にもその人のためになるような行動をしていきます。また、この行動によってクラスみんなのなやみが晴れて、笑顔で楽しい最高のクラスにしていきます。

「中村哲物語」を読んで

白帆台小学校　六年　西浦　百香

私がこの本を読もうと思ったきっかけは、中村哲先生のやったことが気になったからです。医師としてアフガニスタンで人々の治りょうをしていたのに、用水路を建設して、多くの人の命を救いました。どうして全く経験も知識もない用水路の建設をしようと思ったのかそれまでにどんな出来事があったのか、とても知りたくなりました。

哲先生は子供の頃から昆虫好きで、ミッション系の中学校に入り、「人のために働きたい」と医学部へ進学し、医師になりました。その後、色んな縁があり、パキスタンやアフガニスタンで医師として働くことになりました。人々の病気を治すのはもちろん、アフガニスタンが干ばつになった時に、井戸を掘ったり用水路を建設し、アフガニスタンの人々の生活を大きく変えることができました。

私たちは、朝起きて顔を洗ったり、トイレで水を流したり、当たり前のように水を使うことができます。でも世界には、それが当たり前でない地域がたくさんあります。日本では、地震や台風などの災害のときに、断水して水が使えなかったりしているけど、普通に水が使えるということは、幸せなことなんだと思いました。

私がこの本で一番心に残ったのは、用水路建設中のことです。建設現場で働く人たちの真上にアメリカ軍のヘリコプターが飛んで来て、いきなり攻げきされました。ただでさえ大変な作業をしているのに、攻げきされることも気にしなければならないし、暑くて熱中症で倒れる人もいました。

一つ間違えば命を落とすような作業もたくさんあったのに、哲先生はアフガニスタンのみんなのために作業を続けたところがとても印象的でした。これを読んで私は、身近に困っている人がいたら、自分から助けていこうと思いました。

私はいままでにお店などで高れい者の人が重そうな荷物を持っていたり、学校で、けがで松葉づえをついて物が持てなくて困っている人を見てきました。そんな時、私は助けられなかったことの方が多いです。だからこの本を読んだ時、「世界にはこんなに生きるのが大変な人がいるのに、私は困っている人を前にして何もしてあげられなかったな」と思う場面が何か所かありました。

哲先生が言っていた「道で倒れている人がいたら手を差しのべる。これは普通のことです」という言葉を大切にして、困っている人を見かけたら迷わず、すぐに助けられるようにしたいです。

こんなに人のために尽くしてきた哲先生がアフガニスタンでおそわれ命を奪われたことを知って、私は悲しくなりました。でも哲先生は多くの人々に、たくさんのすばらしい物や言葉を残してくれました。

私の将来の夢は看ごしです。哲先生のような立派な人に近づけるよう、多くの人々を笑顔にできるような看ごしになれるよう努力していきたいです。

絆を信じる

内灘中学校　二年　室田　梨湖

私は、小学四年生の冬に陸上競技を始めた。そして中学生になった今も陸上部に入って競技を続けている。専門種目は長距離だ。普段あまり本を読まない私だが、読書感想文を書くにあたって、自分でも読みやすい本はないかと探していたときに出会ったのがこの本である。この本をひと目見たとき、「あと少し、もう少し」という本の題名の意味に対して複数の疑問が浮かび上がった。何が「あと少し」なのだろう。その疑問を解き明かすため、私はこの本を読み進めることに決めた。

この物語には、主人公が六人登場する。陸上部部長の桝井、陸上部であり元いじめられっ子の設楽、不良の大田、頼みを断れないバスケ部のジロー、吹奏楽部であり、プライドの高い渡部、陸上部二年の俊介。六人が力を合わせてタスキをつなぐ駅伝だが、一人ひとりそれぞれに、個性、悩み、葛藤があり、すべてが詰まったタスキ渡しにとても感銘を受けた。

読み進めていく中で、六人の中でも元いじめられっ子の設楽の話が深く心に残った。「走るのは好きか？答えはノーだ。でも、駅伝は好きか？そうなると答えはイエスになる。」この設楽の言葉に私は強く共感した。長距離は練習もきつく、決して楽しいとは言えない。自分と戦い、心に勝つ。簡単に言ってしまえば、長距離は苦しく、きつい。よく、他のスポーツをしている人から「長距離なんてきついだけじゃないの？なんでしてるの？」そう聞かれることがある。そんなとき私は、「きつい練習を一緒に乗り越えた仲間との絆があるか

らだよ。」そう答える。その中でも駅伝はそんな仲間との絆がより明確にはっきりと表面化され、鍵になると思っている。「駅伝をしている時だけは、僕にも仲間と呼んでも許される存在がいるんだと思える。」タスキには仲間の思い、努力、そしてなによりも信頼が込められているのだ。設楽ははじめ、陸上部に入る気などさらさらなかった。桝井に激しく誘われ、仕方なく入ったのだ。設楽は小学生のときに初めて駅伝を走っていた。でもそれは、自分の意思からではなく、断るタイミングも勇気もなかったからだった。「自分のせいで負けたらひどい目に遭わされる。」恐怖心で出場し、恐怖心から練習して、区間賞を取ったのだ。そんな設楽が、最後の駅伝では「この襷を大田に繋ぎたいと、誰よりも早く大田に渡したいと思っている。」そして、「小学駅伝の時とは比べものにならない重いプレッシャーだ。けれど、あの時みたいにつらくはない。この重さが心地いい。」と言ったのだ。設楽の心は本物の陸上競技の楽しさに気づくことで変えられたのだ。陸上競技を通じて自分に自信を持つことを知って、自分の好きなことを心から楽しめるようになったのだと思う。実際、私もそうだった。陸上競技を楽しんで、走っていくことで記録が伸び、成長していった。その度に自分が認められたような気がして、自信に繋がっていった。陸上競技を始める前は、流されてばかりだった。自分の意見を芯を持って強く言えなかった。そんな私でも、今は胸を張って自分の意思をしっかり伝えることができる。設楽の話を読んで、自分の好きなことをすることの大切さと自分の芯を持つことの意味がわかったような気がする。

はじめは軽い疑問から読み始めたこの本だったが、想像よりも遥かに多くの学びと感動があった。

はじめに疑問に思っていた題名の意味について、読み終わった今「あと少し」で勝利が手に入るギリギリでの「あと少し」の頑張りを意味しているのだろうかと考えた。物語中では市野中にたくさんのアクシデントが起こる。エースである桝井の不調、当日のエントリー変更、それを乗り越えた先のあと少しで届きそうな勝利を手にすることができるのか。そこが物語の魅力だと感じた。そして何よりも「もう少し」みんなと走っていたい。「もう少し」このチームで先に進みたい。そんな気持ちが六人みんなの原動力となり、力となっていた。ひとりがみんなのために、みんながひとりのために。駅伝とはまさにこういうことだと思っている。それが簡単なようでなんとも難しく、面白いのだ。

私はこの本を読み終えた今、読み終える前よりも駅伝の楽しさがわかった。そしてこの本を読んで、絆が動かす大きな力と、友情の大切さ、そして自分を信じ仲間を信じることの楽しさをよく学ぶことができた。これは陸上競技、駅伝だけではなく、何事にも共通して言えることだろう。学校生活、行事、これからたくさん仲間と力を合わせることがある。その中で壁にぶつかることもあると思う。そんな時、この本を思い出し、本当の友情を信じて頑張っていきたい。

自分も誰かのタカラモノ

内灘中学校　二年　大多　虹乃花

私がこの本を買ったのは二年生に上がる前の春休みだ。一年生を終えた時、私は周りの人と関わり方を後悔することが特に多かった。二年生ではそのことで後悔することがあまりないような一年にしようと思った。だが、私には自信がなかった。一年生でできなかったことが、すぐ二年生になってできるとは思っていないからだ。その時に私はこの本を見つけた。最初は表紙に目が行った。だが、表紙だけではどんな本かは分からない。裏に書かれているあらすじを読んで、私はこの本を買うことにした。そこには「ハズレの人生なんてないと思わせてくれる」とあった。自信のなかった私には、この言葉はすごく輝くものに見えたのだ。この本を読めば一年生のときとは違った行動ができるのではないかと。

本の帯には「型破りなママと、崩壊寸前の家族の行方は…？！」とあった。主人公のお母さんは帯に書いてある通り、あまり私の聞いたことのない考えを沢山持っていた。主人公ほのみは、最初の頃はお母さんの考えを理解できていないようだった。私も同じだ。だが、ほのみが悩むたびお母さんの型破りの考えでアドバイスしたり励ましたりしていた。私は読んでいて、だんだんお母さんの考えがかっこいいと思えてきた。私は人と違うということが苦手だ。違う考えを持つことはできるが、それを相手に伝えることができない。もし言えたとしてもみんなの反応ばかり気にしてしまって話に集中できないと思う。この人は否定しないで聞いてくれると分かっていても、話せないこと

がある。私はそれがとても悔しくなる。だから自分の意見をはっきり相手に伝えられる人に憧れる。私がほのみのお母さんと違う考えだから、お母さんの考えが新鮮で面白いと思った。私が勝手に違う意見は否定されると思っているだけで、いざ話してみると思っていた反応と違うかもしれない。盛り上がるかもしれない。そういう考えが以前の私の考えに加わった。ほのみがお母さんのことが大好きな気持ちにとても共感できる。いつも寄り添ってくれて、自分の思っている以上に自分のことを考えてくれている。そんな人が身近に居たら自然と大好きになっていくものだと私は思う。寄り添い方にも色々あるが、自分と違った意見でも元気が出ることもあるということを知った。「それは辛かったね」と共感してくれる寄り添い方もある。でも、「そうじゃなくて、こういう風に考えてみたらどう？」と落ち込むような考え方をやめさせて、新しい、自分では思いつかなかった考えを提案してくれる寄り添い方もあると思う。二つ目の寄り添い方は寄り添っていないと思う人もいるかもしれない。でも、それはそれでいいんだと思う。どっちが正解とかはないと私は思う。こういう考えになったのは小説の一文が心に残っているからだ。「自分の人生は自分だけのもの。世間とか、常識とかまったく及ばないことや」さっきの寄り添い方の話は規模が小さかったが、この一文を読んで自分の思いはしっかり持っておきたいと思った。人に伝わらなくても、共感してくれなくても別に良くないことではなくて、「当り前」のことだと気づいたからだ。小学生のときも私のお母さんに少し似たようなことを言われた。お母さんは私がうまく自分の思いを周りに伝えられなかった時、「周りに合わせなくていいんだよ。自分のペースでゆっくりで。」と言ってくれた。

このときはうまくお母さんの言っていることが実行できなかった。でも、小説の文が心に残った今、変わりたいと思っているから、うまく実行できなくても、少しずつ少しずつお母さんが言ってくれた自分のペースを大事にしながら挑戦していきたいと思う。無理に変わろうともしなくてもいいとは思う。でも、変わりたくて、実行できそうな環境に居たら、私はどんどん自分のしたいこと、自分のお母さんが言っていたことを学校に行く前に少しだけでも考えてみんなに自分らしい接し方ができるように頑張ろうと思った。ほのみにはお母さんの存在が大きかったように、私もお母さんの存在が大きい。自分には居て当り前の存在だったけど、ほのみとほのみのお母さんの関係を見るとお母さんは居て当り前の存在だけでないことを再確認させられた。自分が気づいてないだけで自分のことを思っている以上に想ってくれている人がいると気づかせてもらえた。

この本を読んで自分の大切さに気づけた。周りの人が一人でも自分のことを想ってくれていることを信じてその誰かにとってのタカラモノの自分のことを大切にしたい。自分のことを大切にできたら周りの人も大切にできると私は思う。これからは、周りの思いも聞けて、自分の思いもみんなに話せる様な人になりたい。今の副会長の立場を借りて練習していきたい。今年は去年よりも後悔が減ったと思える一年にするために自分からどんどん行動することが目標だ。

愛は地球を救う

内灘中学校　三年　徳川　碧乃

この本は、私が今一番多くの人々に読まれてほしいと思っている本だ。この本に出会ったきっかけは、私の父の友人がおすすめしてくれたことだ。読書感想文向けにおすすめされたわけではない。父の友人に会ったとき、その人が私とのわずかな会話だけで私が色々と思い悩んでいることに気付いてくださったらしい。それで後日、私向けにこの本をおすすめするよというメッセージが届いた。心が読める人なのかととても驚いたが、当時は人間関係などでとても悩んでいたので気遣ってくれたことが嬉しくてワクワクしながら読んだ。

この本の主な人物は二人で、主人公の九歳の少年ペドロと宇宙からやってきたアミと名付けられた宇宙人だ。アミは人間の子供の見た目をしていて、出身の星は地球よりはるかに発達している。ある夜、ペドロは地球に不時着したアミと出会う。会話するうちに打ち解けていき、アミが「救済計画」の一環でペドロに会いに来たことや「宇宙の基本法」についてのこと、地球は三つの基本的な条件を満たしていない「未開世界」の一つであることなどを知った。一通り喋ったあと、ペドロはアミの乗ってきた円盤に乗せてもらって宇宙を旅することになった。旅の中で、ペドロは「愛」の重要さや「宇宙の基本法」について学んでゆく。

私は前述の通り、この本を読む前は特に人間関係で悩んでいた。例えば、部活の部長と馬が合わず仲が最悪だったり、一番仲の良い友達と考えがしょっちゅう合わずに軽い言い合いになって悲しくなったりしたなどがあった。なぜこんなにも人

とトラブルになるのだろうかととてもつらい思いをしていた。

私がこの本を読んで特に影響を受けたことは、自我、自己、うぬぼれということについて、我々に対するまちがった考えである「エゴイズム」が、我々の一番素晴らしい感覚である「愛」をはばんだり、ブレーキをかけたりするということだ。アミは、

「ひとにエゴがたくさん育っていると、他人よりも自分がずっと重要だと考えるようになり、人を軽蔑したり、傷つけたり、利用したり、他人の人生を支配する権利まであるように思いこんでくる。エゴは愛が育つ際の大きな障害になっているから、他人に対するいつくしみ、思いやり、あわれみ、やさしさ、愛情などを感じさせにくくするんだよ。」

と言っており、もしかすると自分にはエゴがたくさん育っていて、無意識に人を支配しようとしたりしているのではないかと考えた。だから考えが合わなかったとき、自分の考えをどうにかわかってもらおうとしてしまって人と衝突するのではないかと気付いた。それに気付いてからは、人と意見が合わなかったときに、自分の意見ばかり押しつけるのではなく、こういう考え方もあるんだ、と流せるようになった。また、自然と相手を尊重できるようになった。そのおかげで、行動に現れたからか部長ともいつの間にかとても仲良しになれて、お互いに「愛」に一歩近づけたし、一番仲のいい友達との衝突も減って毎日が楽しく幸せになった。どんな人にも愛を持って接するように心がけるようになった。

また、「エゴイズム」が今世界の人々を苦しめていると思う。代表的なのは、ロシアとウクライナの戦争だ。戦争になった理由は、ロシアはウク

ライナがＮＡＴＯに加盟することが我慢ならず、ウクライナをロシアに従順な国に変えてしまいたいので武力でウクライナの大統領を排除しようとしたからだ。これはロシアの大統領の「エゴイズム」ではないか。また、

「すべての悪玉は、自分たちの悪を克服できないかぎり、けっきょくは自滅するしかないんだよ。」

「ある世界の科学の水準が、愛の水準をはるかにうわまわってしまったばあい、その世界は自滅してしまうんだよ…。」

とアミは言っている。つまり、愛のあることのためではなく、人を傷つける戦争のための武器や兵器のために科学の技術をつかうと必ず自滅するということだ。確かに、今までの長い歴史の中で武力を使って成り立っていた文明や政治は永遠には続いていない。このことを皆が理解していれば戦争なんて起こらないはずで、今よりももっとずっと幸せな世界になる。

私はこの本を読むまでは、自分の中のエゴについてや「愛」の大切さについて考えたこともなかった。しかし、「愛」が私達にとって最も重要であることやエゴイズムがそれをはばんで自滅にまで追いやることを理解して、ものの見方が一気に変わった。また、人を傷つけることに科学や力を使うと必ず自滅すると知って、常に相手を喜ばせるために尽くそうと考えた。この本は私の人生を大きく変えてくれて、自分が今幸せであることや幸せになる方法を気づかせてくれた。「愛は地球を救う」と信じて、これからもエゴを通そうとせず、「愛」に基づいて相手を尊重した行動をとって、幸せな社会を築いていきたい。

料理から学ぶこと

内灘中学校　三年　小林　玉緒

私は何かを作る事が好きだ。小さい頃から工作やお菓子づくりが好きで今は料理にハマっており、今はほぼ毎日夏休みの昼ごはんを作っている。次はどんなものを作ろうかと図書館の本棚を見ていると「母の味だいたい伝授」という本を見つけた。この「だいたい」というのはどのような意味なんだろうと疑問に思い、早速読み進めた。私は最初この本は作者の阿川佐和子さんが母に料理を教えてもらう本だと思っていた。しかし実際に読んでみると阿川さんの両親が死んだ後、阿川さんが母の味を懐かしく思い自分で考え料理していく本だと分かった。まだ少ししか料理をしたことがない私は味から調味料や料理の行程を想像し作っていくというのは漫画の中のような話でとても衝撃的だった。

私が一番好きな母の料理は唐揚げだ。どこのお店に行って唐揚げを食べても母の唐揚げより美味しいと思った唐揚げはない。この唐揚げのレシピは母の母、私の祖母に教えてもらったものらしい。自分で試行錯誤して美味しいものを完成させることはすごいと思うが。このように小さな歴史があるレシピも素敵だと思う。この本を読んでから唐揚げだけでなく母が作ってくれる様々な美味しい料理の作り方を知りたいと強く思うようになった。

私がこの本で好きなシーンは親戚の集まりに大量のカレーを作って持っていきごちそうするところだ。大人から子供までカレーを褒めているシーンは、こんなに褒められたらいくらでも作りたくなるなと私に思わせた。また、そのカレーは

冷蔵庫にあったものを適当にどんどん入れていき煮詰めて作ったもので、本人ももう一度作ることができないというのも面白かった。私が一番褒められた料理はつくねだ。インスタでつくねを作っている投稿を見つけ、お昼ごはんはつくねにするぞと意気込んだ。しかしつくねの種を作り、焼き始めたところまでは良かったのだが、ひっくり返すのに失敗し崩れてしまった。結局この日のお昼ごはんは崩れたつくねを炒めたものになってしまった。今まで、チャーハンやパスタなど簡単なものしか作ったことがなく、料理においての初めての失敗だった。次の日、成功させて両親のお弁当に入れて食べてもらおうと朝からつくねを作った。母の助言やネットの情報を参考にし、つくねを成功させることができた。一度失敗したからか完成させ両親に感想を聞いたときはとても嬉しかった。また、この本にはキエフ風カツレツやレモンライス、揚げあん焼き、バターコロッケなど世界の色々な料理がでてくる。このような聞いたことがない料理にも挑戦したいと思う。

この本を読んでびっくりしたのは阿川さんが何回も牡蠣に当たって苦しんだエピソードの三つ目のあとすぐにまた牡蠣を自分で料理して食べていることだ。読んでいる私も苦しくなるほどだったのに治ってすぐに牡蠣を食べているシーンは本当に衝撃的だった。私は牡蠣をフライ以外で食べたことがなかったので何度当たっても食べたくなるような生牡蠣を食べてみたいと思った。

私が幸せだと思う瞬間はだいたい美味しいものを食べているときだ。私の家は別に裕福なわけでも貧乏なわけでもない。しかし人生で食べ物に困ったことはない。これはとても恵まれていると思う。世界には飢餓に苦しんでいる人がたくさんいる。調べたところ5秒に一人飢餓で子供が死んで

いるそうだ。また、飢餓で苦しんでいる人々は好き嫌いがあまりないと聞いたことがある。食べること、生きることに一生懸命でそんなことを気にするヒマがないのだ。私はこの事実を知りとても悲しくなった。好きな食べ物も見つけられず、死んでしまう子供がたくさんいる。これはとても残酷な事実だ。私はそんな子供を少しでも減らしたいと思う。そのためには好き嫌いをせず食事をとり、食べ物を無駄にしないようにしたい。また、私がご飯を食べるときに大切にしていることは「いただきます」と「ごちそうさま」を忘れないことだ。この挨拶は料理してくれた人や食材を作ってくれた人、販売してくれた人に感謝を伝える挨拶だ。直接感謝を伝えることはできなくてもこれを言うことで感謝の気持ちを忘れずにいられる。また、自分が料理を出したときにも食べる前に「いただきます」食べ終わったあとに「ごちそうさま」と言われると嬉しい気持ちになることができる。これからもこの２つの挨拶を忘れずに食事ができることに感謝していきたい。

令和五年度　内灘町子ども読書感想文コンクール　入賞作品一覧

【小学生の部　優秀賞】

おやこのきずな
大根布小学校　一年　菊田（きくだ）　稜心（いっしん）

「盲導犬デニム」を読んで
鶴ケ丘小学校　三年　宮川（みやかわ）　星乃介（ほしのすけ）

「うまれてくるよ海のなか」をよんで
西荒屋小学校　一年　中新（なかしん）　真緒（まお）

おおきな木を読んで
白帆台小学校　四年　玉置（たまおき）　大樹（だいき）

みんなをささえるヒーローたち
清湖小学校　二年　板谷（いたたに）　将虎（まさとら）

世界中の取扱説明書
西荒屋小学校　四年　新出（しんで）　彪馬（ひゅうま）

「それで、いい！」を読んで
鶴ケ丘小学校　二年　橋本（はしもと）　文乃（ふみの）

「電池がきれるまで」を読んで
向粟崎小学校　五年　蔦濱（つたはま）　莉帆（りほ）

０てんとったらどうしよう！
向粟崎小学校　三年　的場（まとば）　楓香（ふうか）

えびす舞のきずな
清湖小学校　五年　喜多（きた）　柚月（ゆづき）

みんなのために動いてみよう

清湖小学校　六年　武田（たけだ）　唯音（ゆいと）

「中村哲物語」を読んで

白帆台小学校　六年　西浦（にしうら）　百香（ももか）

【小学生の部　入選】

「けんかのたね」をよんで

向粟崎小学校　一年　塩本（しおもと）　涼（すず）

へなちょこじゃないよ

清湖小学校　一年　甲野（こうの）　栞理（しおり）

「よるのあいだに・・・」

大根布小学校　一年　太田（おおた）　結月（ゆづき）

ーーぴきのねこをよんで

白帆台小学校　一年　綿谷（わたや）　陸之介（りくのすけ）

なかなおりのたね

向粟崎小学校　二年　武田（たけだ）　幸仁（ゆきと）

すきなこと　にがてなこと

清湖小学校　二年　荒木（あらき）　海飛（かいと）

けんかのたね

大根布小学校　二年　干場（ほしば）　琥生（こう）

わたしのみかた

白帆台小学校　二年　中川（なかがわ）　和（にこ）

「おばけ道、ただいま工事中？！」を読んで

清湖小学校　三年　中山（なかやま）　航希（こうき）

戦争をやめた人たち

大根布小学校　三年　髙山（たかやま）　瑚子（ここ）

わたしのもくひょう

大根布小学校　三年　清水（しみず）　麻陽（あさひ）

ぼくはどこ？たかまつとうやを読んで

白帆台小学校　三年　髙松（たかまつ）　冬弥（とうや）

「生きると思える原動力」

向粟崎小学校　四年　飯田（いいだ）　周平（しゅうへい）

わがままなロボット

清湖小学校　四年　馬渡（まわたり）　凰介（おうすけ）

「アフガニスタンの少女ラズィアのねがい」を読んで

鶴ケ丘小学校　四年　越能（こしの）　壮大（そうた）

私もやさしくなりたい

白帆台小学校　四年　濱江（はまえ）　はる

「海のためは生き物のため」

向粟崎小学校　五年　紹井（かすい）　菜々香（ななか）

しゅくだいがっしょうを読んで

鶴ケ丘小学校　五年　鶴耒（つるぎ）　優音（ゆのん）

ありのままで

大根布小学校　五年　出嶋（でじま）　柚李（ゆうり）

5番レーンを読んで

白帆台小学校　五年　辻村（つじむら）　友希（ゆうき）

本当の友情とは

向粟崎小学校　六年　竹中（たけなか）　花歩（はる）

努力をすると、願いがかなう

鶴ケ丘小学校　六年　松本（まつもと）　幸太郎（こうたろう）

「アンネのバラ」を読んで

大根布小学校　六年　宮田（みやた）　愛子（あいこ）

水の大切さ

白帆台小学校　六年　織田（おりた）　遥都（はると）

【中学生の部　優秀賞】

絆を信じる

内灘中学校　二年　室田（むろた）　梨湖（りこ）

自分も誰かのタカラモノ

内灘中学校　二年　大多（おおた）　虹乃花（このか）

愛は地球を救う

内灘中学校　三年　徳川（とくがわ）　碧乃（あおの）

料理から学ぶこと

内灘中学校　三年　小林（こばやし）　玉緒（たまお）

【中学生の部　入選】

ばけものが教えてくれたこと

内灘中学校　二年　竹森（たけもり）　優衣（ゆい）

一歩前に踏み出す

内灘中学校　二年　竹中（たけなか）　星愛（せな）

「個性をみんなの力に」

内灘中学校　二年　村上（むらかみ）　煌河（こうが）

「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」を読んで

内灘中学校　二年　櫻本（さくらもと）　真帆（まほ）

「繊細な世界」

内灘中学校　三年　小杉（こすぎ）　はる

ブラザーは心の中に

内灘中学校　三年　寺田（てらだ）　皓一（こういち）

「人の色」

内灘中学校　三年　吉治（よしじ）　朝陽（あさひ）

生き方を振り返る

内灘中学校　三年　谷内（やち）　愛弥（あゆみ）

編　集　後　記

今年度も町内の小中学校から作品を応募いただき「内灘町子ども読書感想文コンクール」を開催することができました。

児童生徒の皆さんをはじめ、子ども達の「読書活動」を推進されている先生方、読書ボランティアの方々、保護者の皆様方にご協力いただき、ありがとうございました。

今年もまだまだコロナ感染を気にしながらの図書館利用となったと思いますが、多数の感想文を提出していただきました。大変うれしく思っています。どういうふうに書いてよいかわからないとの声もあり、夏休みにはいって、親子で感想文の書き方の勉強会を開催しました。とても喜んでいただけたと思います。

今回も作品集を編集するにあたり、優秀賞に選ばれた作品の全文を掲載しました。子ども達には、友達の作品に触れることによって、自分が本を読んだ時の感動や喜びを思い出してもらい、今後の読書活動の参考にしてもらえたらと思います。また、先生方や保護者の皆様方には子ども達の感性の豊かさや、その成長の様子を感じていただきたいと思います。

読書は人間の心の成長にとって、とても大切なものです。子ども達が本と出会い、感動を覚え読む楽しさや知る喜びを体感できるよう、私たち学びの風推進協議会は、今後も子ども達の読書活動を応援、推進してまいります。

結びに、改めてコンクールにご協力いただいた多くの方々に、心より感謝申し上げます。

内灘町学びの風推進協議会

会長　中新　由紀子

発行者

内灘町学びの風推進協議会

会長　中新　由紀子
副会長　荒木　真由美
委員　高嶋　滋子
浮田　いづみ
竹村　文子
宮本　由紀子
中村　敏男
浅尾　るり子
島　智一

内灘町教育委員会